

化学教育 徒然草



科学博物館へ行こう

MURAKAMI Masahiko

村上雅彦

日本大学理工学部 教授
平成 29 年度普及交流委員会クイズショー小委員会 委員長



巻頭言

昨年夏、出張の際に欧州諸国の科学博物館を訪れる機会を得た。家族旅行ではこうした機会は限られるため、得難い経験であった。ロンドンの科学博物館 (Science Museum) では「本物」の物量に圧倒され、ミュンヘンのドイツ博物館 (Deutsches Museum) では、遊園地のお化け屋敷風に各年代の採掘現場を再現した地下経路を小一時間回される「鉱業」の徹底した展示に驚くなど、主張ある展示とお国柄に感銘を受けたが、特に印象的だったのはパリの“発見の殿堂” (Palais de la découverte) である。

1900年パリ万博の際に建造された重厚で見事な建物 (Grand Palais) の一部に、自然科学系の常設展示と巨大な電磁石などの装置を常設した実験ステージを多数有する。展示で特徴的だったのは、随所で「科学の方法」を説いていた点である。例えば、放射能・放射線に関する展示では、展示とともに当時の研究者たち (A. ベクレルやキュリー夫妻など) が、“何を見て、どのような仮説から、いかに実験し、解明に至ったか?” を解説していた。一方、演示では複数の実験コースを同時に実施 (訪問時は化学だけで3コース) するなど、規模の大きさに圧倒された。内容にはかなり高度なもの (例えば「香料の化学」で超臨界流体抽出など) も含まれていたが、親子連れの子供たちが積極的に手を上げ、最後まで集中して参加していたのには驚かされた。

どの国にも共通していたのは、展示を熱心に解説する親とそれに真剣に耳を傾ける子供たちの姿であり、それはそれぞれの社会への科学の根付き方を表しているように思われた。果たして我が国ではどうだろうか? 現在、子供たちへの科学の普及には、当学会の取り組みをはじめ多くの活動が存在し、所定の効果を上げつつあると感じているが、大人に対する活動は残念ながら質・量共に全く十分なものとは言い難い。こうした現状において、子供をある種の梃子にして大人をも科学に巻き込むことができる科学博物館の役割と、これに対する期待は大きい。

ここまで書いて気付いたのだが、前に上野の国立科学博物館を訪れたのはいつであったか? 恥ずかしながら、思い出せない位前のことである。今度の休みには、上野へ足を運ぼうと思う。

[連絡先]

274-8501 千葉県船橋市習志野台7-24-1 (勤務先)